



叙

巢兆翁。善誹諧十七字吟。厭世之煩囂。而隱于關屋之里。其居之東。稻田萬頃。一望彌空。因號曰秋香庵。又自稱菜翁。性嗜^酒愛客。錢到手則散之。不惜瀟灑脫落。其人可觀矣。翁又善畫。氣韻高古。有鳥羽僧正之風。其常所用之松甫印。即其父山本龍齋先生表德之私印也。翁以為畫中款焉。先生於余丈人行也。因余與翁

叙

巢兆翁誹諧十七字の吟を善くす。世の煩囂を厭ひて、關屋の里に隱る。其居の東、稻田萬頃、一望空に彌る。因て號して秋香庵と曰ふ。又自ら菜翁と稱す。性酒を嗜み客を愛し錢手に到れば則ち之を散じて惜まず。瀟灑脫落、其人觀る可し。翁又畫を善くす。氣韻高古。鳥羽僧正の風有り。其の常に用ゐる所の松甫の印は、即其の父山本龍齋先生表德の私印なり。翁以て畫中款となす。先生は余に於て丈人の行なり。因余翁と交情殊に密なり。翁妻子を棄て道山に行く者。已に三

交情殊密。翁奔妻子而行
于道山者。已三載。今茲其弟
子國村者。集其句而欲傳諸
同志之士。乃徵序於余。讀之
不勝感奮之情。於是濡筆於
涕。而題其首。

文化十四年丁丑夏五月

友人 鵬齋老人興撰



載。今茲其の弟子國村といふ者。其句
を集めて諸を同志の士に傳へんと
欲す。乃ち序を余に徵す。余之を讀ん
で感奮の情に勝へず。是に於いて筆
を涕に濡して、其の首に題す。

文化十四年丁丑夏五月

友人 鵬齋老人興撰



巢兆句集序

秋香庵巢兆はもと俳諧のともたり

晨月夕に句作して我に問ふ我も又句に
して彼に問ふ彼に問へば彼譏り我
にとへば我笑ふわれ書を舉ればかれ題しか
れ書ば我讚すかれ盃を舉ればわれ餅
を喰ふ其草稿五車に及ぶ兆身まかり
て後國村師を重ずるの志厚し一冊の
草紙となし梓にのぼす其はし書せよ
と言ふいなむべきにもあらず頓に筆
を捨て只兆に譏られざる事をなげく
のみなり

文化丁丑五月上澣日 抱一道人屠龍記

文詮

巢兆句集序

秋香庵巢兆はもと俳諧のともたり。花
晨月夕に句作して我に問ふ。我も又句
作して彼に問ふ。彼に問へば彼譏り、我
にとへば我笑ふ。われ書を舉ればかれ題しか
れ書ば我讚す。かれ盃を舉ればわれ餅
を喰ふ。其草稿五車に及ぶ。兆身まかり
て後國村師を重ずるの志厚し。一冊の
草紙となし梓にのぼす。其はし書せよ
と言ふ。いなむべきにもあらず。頓に筆
を捨て、只兆に譏られざる事をなげく
のみなり。

文化丁丑五月上澣日

抱一道人屠龍記

文詮

葉水齋文集
梅全集

歳旦

大あたま御慶と來けり初日影

俊成卿

玉簪はつ子の松にとりそへて

君をそ祝ふ賤か小家まで

けふとてぞ猫のひたひに玉はき

竈獅子が顔ではらひぬ門の松

(此句「一茶發句集」に見えたり)

野店

酒簀やとうふ和らぐ御代の春

梅

藪尻にはづみのつくや梅の花
とりわきて蕎麥粉の禮や昌の梅
皿鉢の寒いうちなりうめの花

山家に遊びて

梅折やこれも雀の寶もの

とし毎に圍爐裏借るなり梅の主

坂倉素交と梅見にまかりけるに

雪のけしからず降ければ

すべつても梅にすがらん杉田みち

難波にて

舟曳や五人見事に梅を喫

梅散るやなにはの夜の道具市

蠅家根の出村へむくも梅の春

うめ散や蛤貝の蝶つがひ

魯隱が別莊

柿壺や奥に老木の梅の花

十園子に氣のつく梅の苔かな

苞もの脊負たる老人の繪に

今出た駄花の梅田を梅の花

母上の密(蜜)柑召けり梅の花

梅が香や様子のよさに芹を摘

満島夜泊

梅が香やおもへば寐たる龜の上

七福の讃

隣から梅に階子や福祿壽

旅僧を布袋かと見し春の水

初寅

酒樽を鉢でまねくや春おろし

巳待

福天の御息もかれ玉の春

大黒天小ねらに松をひかせ給ふ

人麻呂に鯛もあれかし若恵比壽

乗かえの鶴もあるなり落し角

柳

青空に馴て米ふむ柳かな

黄昏は湯衣かけたる柳かな

傘かりて疎き人見る柳哉

待戀の翌日に延たる柳かな

青柳ほどけて枸杞の垣根かな
稻村を町家にまぎて柳かな

あかつき衣紋坂と云處を過るに

四〇〇〇〇家根にもさつと青柳

(四字不明、下の二字は「兵衛」とも讀み得)

人目

とくくの水より淺き若菜哉
金春がひと群出たり摘わかな
七種や御末がしらに藤ばかま
むくくと若草はゆれ草の庵
わか草や鉄のさわりし小笹道
べたと置鍋のめぐりも春の草

莖

ゆく水に嗅で捨けりすみれ草
市女笠すみれ尋ねと答へけり

なの花

菜の花や染て見たいは富士の山
菜の花の舞こんで居る坐敷哉
菜の花や小窓の内にかくや姫

なの花に造り木見ゆる明屋かな

小袋のこぼれ花咲菜種哉
菜の花や初土器の井堰の里

山吹

山吹は峯入ちかき盛りかな
やま吹やぬれ手を切て九折
山吹に蛙のたゝく屏かな

花

いくとせも花に風吹さくらかな
鶉の枯す木の間の花の咲にけり
道命とうしろあわせの花見かな
歸るさに松風きゝぬ花の山
築かけて一夜明たり初ざくら
椀家具も晋せで花の小鹽山
かし鳥のあたりに今朝は花見哉
宿かりて又見ん花のあらし山
先花の大山崎やひがし白
ちる花や帶しめ直す石の上
寐ごゝろも燕持兒や門の花

岡田川にて

四阿を馬屋にしけり花の雨
暮そめて小家したしき櫻哉

白魚の爰等で孕むさくら哉
扇借せ花見出て来る鼻の先

老懷

遊女奥州が笠言を摘

挑灯のてれんも見へぬさくら哉
朝の間にさくら見て來て老にけり

金輪寺詣音聞

村雨の若葉をいそぐさくらかな

寓鳥

片瀬からこゝろにかけし櫻かな
手のくぼに残る小鯛や潮の花

牛島奉納

藤折らじ肩にかけると呼子鳥
腹赤焼家を巻なり藤の花
むかふから旭湧なり藤の花
藤咲てゆらつく橋のすがたかな
流れ汲隣もひたすつゝじかな

山姫や温泉壺に活し花つゝじ
三園の鳥居とそだつ杉菜かな
苗松のひとつに育つ杉菜哉
紅梅にいともしかしこし御鷹宿
放下師か雪をかほらせ桃の花
桃咲や西瓜畠のあらおこし

うたぶくろといふものに歌書た
るを見て

おもひ入る蛙や摘んつくし
はびこらぬ顔で芽を出すちよろき哉
駿河なる山葵越るや箱根山
連翹や鴉のわらじのかけどころ

國村柳翠兄といせ參宮する馬の
はなむけに

双六の六部に逢ん宇都の山
太々や福引とりてぬけ参り

初午

鎌くらの佐助や誘ふ旅ごゝろ
朝ぐもり六浦の煤へ爆竹今や焚
太箸や削らぬさきの杉の月

蓮根の穴から寒し彼岸すぎ

初雷

あしがらはまだ出ぬ神のとゞろ哉
田やかへすへたらく谷の底
畠打や穴のきつねに餅居て
どこぞでは婆々にやならんたけり猫

田家

鶯の鳴や色めく繩すだれ
うぐひすや竹の子見たる市戻り
鶯にこの曙を田舎かな
鶯を二籠釣て野は遠し
うぐひすの家根からをりる畑かな
鶯やもとの清水の原屋敷
鶯のみがく椿や藁屋なみ

かまくらにて

うぐひすや夢想國師の堂の前
雉子が鳴餅屋の脊戸も塔の辻
高茅の刈らぬ裏戸も雉子の聲
二葉より豆鐵炮やきじの聲

廣畑に雛もまだなき雉子かな

鎌倉覽古

灰蒔し畠があればぞ啼ひばり
旅人の五日遅くばさぞ雲雀
つばくらに残す築地や撞木町

蛙

かたむきて田螺も聞や初かわづ
我からと藻屑の中に啼蛙
禪門にをくればは飛胡蝶かな
鉏策に盛ればこぼるゝ田にし哉
柴の戸や泥かけて行田螺とり
隣同士白魚買ん夕月夜
しら魚やしらぬ葉に盛舟の上

霞

和布を刈や霞くむかと來て見れば
霞む日や佛のあかし遅なはる
防風で濱は葦なり春の風
春風や一期さかえし榛の花
春雨や斯しておいて峯の雲

はる雨や簾を卷て鶴御覽
芹生にて芹田持たし春の雨
炭竈と手に手をととりて春の水
曲らずにくわぬの角や春の水
山里は麥飯すゝむ雪解かな
雪解や穴のきつねの宜上り

由井瀧覽古

佐保姫の額に見ゆれ磯の浪
佐保姫の野道に建る小旗かな
佐保姫に駒もよまるゝ鼻毛かな
茅屋根に鶉の長閑なり鶉の雨
山姫の動かす松に春深し

時鳥

谷へ掃はゝきのさきやほとゝぎす
鳴け聞ふ木曾の檜笠で時鳥

遠山やところかはればほとゝぎす
ひがし山とつてかへすやほとゝぎす
よし田殿末社巡りやほとゝぎす
新しき橋のにほひやほとゝぎす
時鳥まだ見に来ずや隅田川
ほとゝぎす九反かけたよ紫屋

時鳥啼や御繪師の宿衣

いざやとて脊を干す鳩よ時鳥
あかつきは鐵漿もにほへやほとゝぎす
早乙女が横轉ふ庵やほとゝぎす
茶引草裾になびくやほとゝぎす
三圍で聞もやすらんほとゝぎす

草庵の蘆橋大雪にいたみてわか

葉の頃も不沙汰なりける八千代

の蔭をしのびあへざるに

ほとゝぎす啼けばむかしの軒端哉

上野國赤岩高恩密寺に高野大師
の持せ給ふ五鈴あり。それが中
に松虫とやらん清音すぐれて涼
しく聞へたるありければ

松虫の音にふりたてよほとゝぎす

桐生米室を訪ふ

脊戸口の伏猪もやさしほとゝぎす
三井寺もほろ／＼あへ賊ほとゝぎす

山寺

浴室に苔がはへたり閑子鳥
とゝ鳥の日馴て啼や閑子鳥
閑子鳥啼や朔日十五日
十景を握て啼や閑子鳥
眺なら常山の花やよし雀
笈佛の戸をたてゝ聞水鶏かな

成田にて

盃が出ればはや来るほたるかな
隣から灯かけのさして行ほたる
曲りこむ藪の綾瀬や行螢
豆の葉や豆腐に着せて飛螢
螢追ふ門や風呂焚やせ男
糸竹に蝙蝠の舞月夜かな
かはほりが眼を射てやらん小挑灯

華他か五禽の説といふことをし
て

輻の月後は臥猪の駢かな
旅中

芒から蚊の出る宿に泊りけり
蠅追ふてひやうたん町に入にけり
紀の關も越ば伴へかたつぶり

草庵に茶立虫といふもの啼。あ
る人のいひける、この虫の聲を
聞時かならず好事あるべし。謠
にかくれ里ともいへりと

米櫃のそこらであらん隠れざと
蟬啼やとばしる瀧にはぢかれて
蟬の音に薄雲かゝる林かな

南湖

赤貝にひかるゝ裾やころもがえ
山寺や蜂にさゝれてころもがえ

草堂

茶釜ほどある歟なき歟の牡丹哉
門守の婆ゝも野等こく牡丹哉

打水の雲きりにたつ牡丹かな
岩からもはへずにやさし杜若
おし出して塔一蓋の若葉かな
山路来て見事に歩行若葉哉
傘のちいさく見ゆる若葉かな
爺婆ゝが寐所掃出すわかば哉
ふるさとの梅の若葉や堂籠

路川が兄の追善に

卵の花やかくれん坊のそれなりに
うの花や振て投こむ松明殻
卵の花を粉にはたきたる嵐哉
卵の花やそもくこれは土器師
庵を出て雪ほどしろしけしの花
驚の來て伴ふ宿やけしの花
駕の酔葵見しより醒てけり
あぢさゐや煮てかためたる花でなし

夕顔

夕がぼや逢たき人の途衍字カ飯時分
夕顔やよその空なる稻の殿

夕貌や夕越へくれば馬に餅
晝顔や芒の玉の消るとき
馬借て伊香保に行んあやめ哉
雷晴て蓼まだ苦き氣色哉
土持は買人やつきし蓼屋敷
若竹や龍道のぼる藪からし
竹の子や笈の通る路すがら
竹の子や客に問れて雨の簀
たけの子や馬飼ふほどの藪の主
竹の子を花活に切るやさかな
竹植て猿鼻禪かけばやとおもひけり

舟中

見落すな合歡の小家の酒ばやし
合歡咲や柘つげの小櫛もほしげにて
藻の花やさそひ分たる紺屋形
川骨や碎けぬ花にさゝら浪
蓮の香に起て米炊たくあるじ哉

鳴立澤にやどりて

鶏が啼翌日はかならず虎が雨

妻沼にて

五月雨やまくら借たる桑の奥
五月雨や眞野の長者の菅を刈
夕立やいたゞく桶もぬけるほど
ひるがほに足投かけし植女かな
植かけて飯くふ小田はなかりけり
夏の夜や茶木ちぎの桶に敷むしろ
みじか夜や三味せん草に蝶のかけ
夜をこめて打や淺黄の夏衣
六月は稻の葉伸に朝茶かな

端午

江に添ふて家くゝに結ふ粽かな
こそくゝと夜舟にほどくちまき哉
尾上から大根おろしやはつ鯉
憂人の鮮にもすこし初がつを
飛魚の蟹のいきりやはつがつを
江の島や傘さしかけし夏さかな
芋の葉で一夜育ん初なすび
村中にうからやからやひと夜酒

玉鉾の白ひ(い)日傘も通りけり

涼しさは田舎に見ゆる夫婦かな

涼しさにかたちづくります山の上

風薫るまくらや小笠小風呂敷

竹の葉や脊を櫓るたかむしろ

清水

ひやくと田にはしりこむ清水哉

駒の出んひさごをひたす清水哉

花桶もいたゞき馴し清水哉

見し人の鍋搔て居る清水哉

馬に鞍醫者を夏野の行衛哉

春夏都二百三十七句

巢兆發句集

(以下は國村の板下なり)

善光寺各中

なに事かしなのぶりなる今朝の秋

秋たつや田の草とりをよぶこ鳥

ひとわたり菜のかいわれてけさの秋

初秋や鴈をうかゞふ五位の聲

猫のかくはしらもひかれ今朝の秋

隣家看白

夜ざらしの二布干なり天の川

星逢に見やる山田の立樹かな

鱧舟すゑによる瀬や銀河

七夕に星の入たる色紙かな

年くや梅ぼしくさきかし小袖

信州若人亭

七夕後朝

朝貌の花に澄けり諏訪の湖

文月七日

まつ島やされば琴引秋の風
かはほりも里のやつれや秋のかぜ
馬^{うま}に打まかせてやあきの風
野分にも關屋の蘆の片葉哉

しなの、國吹嵐と云處にて

栗少しこれや鳴子の吹あらし
もとあらの萩をしほるや秋の雨
尻べたの蚊を打芋の葉風かな

修理の太夫顯季卿なりしか、木

賊刈その原山の秋かぜにみが、
れ出る夜半の月かげと詠るを

その娘の君、鏡のうらに鑄させ
て、戀しき時の父の記念と見た

まひけるを、尼になりてのち、
法隆寺の峯の藥師佛におさめけ

るとかや。玉棚のおくなつかし
きをりにこそ、とおもひよせら

れ侍りて

孟蘭盆やたまに呼込鏡磨
老ぬれば西瓜に沁るおどり哉

八朔や鴈の貌のめづらしき

鹿

馬屋より下に來て啼小鹿かな
笹山や小男鹿急ぐ夕間ぐれ
大坂の便に申ける

河内屋で膳を出さばや渡る雁
旅ひとりひはらゝと鴈がなく

乙因を歎くもありや南部雁

(乙因は金子半藏と稱し、奥州
の人、江戸住、文化四年四月
二十五日名古屋に歿す。)

賜一羽來て搔まはす麓かな

友人蘭窓、野もせにすだく虫の

音を狩て、あまた竹叢の軒端に

掛おけり。唐もろこしの籠の目

あらみ、赤土の露を絶さず、瓜

茄子の養ひおるそかならねば、

うぐひすの子の笛に馴るごと

く、たがひに清音をたしなみて

令くとふり出る聲、長月のは

じめに至るまでもうかれず。

是をもつて人間五音の調べおよ

ばざるを愧るといへどもむべな
りける。

鈴虫になるや窻のきりゝす
土べたの鐘もひびけときりゝす
まつ虫や風の吹夜は土の中

閑庭

ほつれ笠着た僕もあり虫の聲

探題

たもとから裾輪の田井の蝨哉

蜻蛉や錢百つけし杖のさき

白露のたけもたぬやつどれさせ

あら物おもひの翁や。上田の辨

才、松もとのはり箱とて、あだ

し仇名のゆかりもなつかし。淺

葉(淺間)の湯げたあさくとも、

泣て見ましを、さゝのふし寐に。

山家

はり箱がまくらに狂ふ夜寒かな

年□□(三季)の推にもはまる夜寒かな

朝寒や夜明し寺の鼠ども

美濃の國善司野と云處にて

翌日はく草鞋打家の芒かな
一休が魂迎するすゝきかな
弓取の見込も深き芒かな
寐たがらぬ豕を追こむ芒哉

隣家

萩咲て夫婦の小言かくれけり
立白に小根がはへてや萩の花

病中重陽

菊添よおろかながらも藥鍋
きくさくや驛くの酒祭

一枝折盜の戒を得ざる菴なれば

腹いせに溫石あぶるもみち哉
釣柿の干兼て染る紅葉かな
日ぐらしも啼ねば淋し初もみち

秋草

關の戸にほのく見ゆる糸瓜かな
先いはへ小ぬかに似たる稻の花
端近に客はおかれぬばせをかな

壁ぬりの隣へまはる紫苑かな

こまゝと垣根結びておみなへし
足弱の杖にからまる眞葛哉

露

草の戸や井をとり込て露の玉
みよくと夕貌つたふ露の玉

姥山良夜

里人や白髪になりに行月夜
明月に都は芹のもやしかな

廣田社

鳥居出るおしさや杉に秋の月
明月や小鳥の壺の菜つみ丹
貝われの菜晶のおくや初月夜

對清光病中

抱おこせおのれ月見む萩芒

仲秋無月

十六夜もはづれて松の草鞋哉

中川といふ處に至る。小家がち
なるあたり、それとなくしのば
しくて、さしのぞきけるに、

どれからと萩の隣や後の月
象潟の合歡の落葉や後の月
柞原薪樵るなり秋のくれ

時雨

柴の戸に夜明烏や初しぐれ
兎や角と算せしより降時雨
尼達の旅寐催すしぐれかな
取あへぬ山餅さかなやはつしぐれ
朝夕の不二もけぶらぬ時雨かな
市人の炮録(發)冠るしぐれかな
時雨るや一降ふつて峯の松

生田の森にて

小雪せよ笠着て舞ん神の前
急がねば初雪のふる旅路かな
初雪や關の清水の埋れむ

はつ雪や石に敷たるさんだはら

霜月なれば松もとより故郷へ歸るとて

初雪に着るや古手の蔦の紋雪明りあかるき閑は又寒し大雪に餅をならべし薙かな初霜や田の土とりて甕をぬる伊勢の御師の折敷に溜る霞哉

武甲山の谷間を通るに、落来る瀑布のそのまゝに氷るあり。さ

ながら千條の玉枝をかへ(け力)たるが如し。まだ見ぬ人の土産にもがなとおもひたるほどに

鞍壺に瀧を負せん氷柱かなこがらしや口もきかずに草の菴

須磨夜泊

あら寒やかかの村雨が閑の月

比企の郡毛呂と云處より同行の江戸に歸るを送る。この日十月晦日なり。

栗さぞ小手さし原を歸る神

小笹吹風も何やら神無月

野火留や宵曉のかぶら汁冬枯のなつかしき名や蓮臺野

鎌の柄を空に伸して冬木立

小金が原にて

菟蕪に馬の踏こむ狩場哉

梵院照法燈

明るさに薔菱切實も十夜哉

風邪ひかぬ御法の聲や御命講

信州柳莊追福

月を見に今年も出ばや寒念佛

斗入法師身まかりけるしなのゝ

國七くりの湯といふ處に行て、

その跡を吊ふとて、

惟茂とおなじけぶりとや積落ば

梵論の行麓靜に落葉哉

かゞみ磨寺町のぞくおちばかな

爺婆の有がたくなる木の葉哉

みちのく行脚の頃

栴焚てよしつね殿をひるき哉

明ぼのを結びながすや炭けぶり

炭賣て小野で別し碁打かな

千どり

まつ原や馬にわかれれば啼ちどり

には鳥が啼ば聞へぬちどりかな

旅鳥磯にともなふ千鳥かな

一年三百六十夜寒間の恨をかこ

つといへる釀家の婦人をあわれ

む。

きぬを踏脛より鴨のあぶら哉

越後からふたつ連てや浮麻鴨

蘆鴨の寐るより外はなかるべし

かならずや三千の後宮、午房の

ちからをたのむにあらじ。にん

じんを好ものゝ琴心を挑ると

て、浅づけの淺からぬちぎりと

こそかきならされける。

錦木や染ぬ大根に啼家鴨

むさしのゝ野中に引や土大根

盤築(岩槻)の城下にやどりす。

諸客混雜の中にて

葱の香や浮世をわたる其中に

山家に遊びて

茶の花や茶菓子のにさにおりに行

神無月の末にやありけんむさし
野を越ゆるとて

逆水の果や花さく茶の木垣

水仙や屋根が出来たと啼鳥

轉び人もなくてや残る冬のきく

一々相如が駕をうながせば、三
日東坡が千錢を愁ふ。あなあぢ
きなや白鶴城東の乞食。

難波津や酒をひかへて冬籠

平暮

煤竹もたはめば雪の雀かな

年暮ぬ市に住なら明石濁

行としや千代の街の須磨の浦

我庵はよし原霞師走かな

秋冬都一百十九句

先師茶翁の句集一卷、弟子吾がともが
らばかりて、のちに傳へん事を欲す。
翁世に在し時、手づから撰て、そば刈
と題すもの、已に春夏秋冬二部あり。其
頃わづらひがちにして、自撰するにい
とまあらず。遂に黄泉に趣(赴)ぬ。
その餘若干句、等閑に捨て置きにあらざ
れば、別に人を請ふてこの集をはじめ、
終に全部となして梓にあげぬ。庶幾は
翁の志業を空しく成さずと云。

國むら謹書

書房

國むら謹書

大坂心齋橋南久宝寺町

河内屋八兵衛

江戸馬喰町三丁目

若林清兵衛

曾波可理